Faculty of Cultural Development, Department of Cultural Development

OYAMADA Takaaki

Received September 19, 2014

Psychotherapeutic Effects of Renshi Poem

—An Investigation of Silence Ben’s Case

Land of Stone: Breaking Silence through Poem

Chase, K
連詩の心理治療の効果
一物言わぬペンの事例の検討一
（小山田隆明）

復のための方法になる可能性を示した。
（ギ・ワード）詩
連詩療法
会話障害
心理治療的效果

はじめに
これまで詩を書き、詩を読むことによる心理治療の効果は、隠積
した感情のクアルシスと認知的客観にえることを指摘してきた。同一
時に、詩の作詞形式により、心理治療目的の効果の異なることを示唆し
てきた（小山田、2012, 2014）。本論文は、詩人チャーシュ（Charis）が
物言わぬ若者ペン、（R.）に連詩を用いて会話を回復させた記録
を解き放つ詩(2007)を連詩療法の観点から検討したものである。そ
して何らかの理由で、他の人のコミュニケーションに障害が生じ
ている人たちの治療、回復への手掛かりを得ることを意図した。

1. 連詩とは何か

一九八六年にオクタヴィオ・パス（Ogáve Pags）メキシコ、フ
アランス州、イギリスの四人の詩人がニューヨーク市に集まり、日本の
伝統的な連歌の作詩形式に倣ってそれぞれの言語にソネット形式
の詩を書いていた。その詩集〈Renga: A Chain of Poems〉（連歌詩
の鏡1972）は、クロッペンシュテルン（Kroppenstein, E . 1987）に
よれば、四人の詩人の中の詩を組み合わせて、共同作業的性格を
予る。ヨーロッパにおける最初の連詩（連鏡）の詩集でもあると思
っている。一九七九年にアラスカで開催された詩人の集合で出会いス
タッフォード・ヘンプ（Sta tford W. & Bellum, 1986）は、互いの詩を

その地域では直接に、その後は手紙で交換し、詩集「セリエー応答
する詩」〈Song A Correspondence in Poetry〉を作っている。この
詩集は、数少ない連詩集であることをセリエーという名前が示してい
る。セリエーとは、音楽の演奏において前後の楽章の緊密な関係を指
示する用語だからである。複数の人が共同してひとつの詩（現代詩）を
作る作詞形式を連詩

連詩と呼んだのは、大岡信と現代詩論の権威の同人たち（1987）
である。大岡（1987）によれば、連詩は日本の古典的な共同作
の詩であり、連詩からヒントを得たもので、詩の作者同士の
間で、生き生きした対話を求めるとする連詩・連句の精神を受
け継ぐものであるという。

連詩と呼ばれる用語は、大岡らと欧米の詩人たちにより連詩が試みら
れ、その連詩集が出版されてから（大岡他、1985, 1987, 1988）
欧米の詩人の間で知られるようになってきたが、詩歌療法の研究者には
現在も全く知られていない。詩歌療法における共同作詩コラボレ
ティブ・ポエム（collaborative poem）は、複数の人が共同してひ
とつの詩を作るとという詩作形式に関する連詩や連句も共同制作詩であ
り、オクタヴィオ・パスらの詩集「連歌詩（連歌詩の際、連詩を連歌と
混同しないためにもコラボレティブ・ポエムにこの詩を用いることにした。
連詩は、詩作の理念においてひとつの独自な詩を意味し、コラボレ
ティブ・ポエムは連詩の概念に含まれるゆえに、連詩という詩語
を用いることは適切であると考える。
2. 連詩療法

連詩は詩作の理念において連歌・連句の精神を受け継ぎ、詩の作
者に興味や感情をふるわせるものといわれる(大塚 1987)。主
張の一つは、連詩療法において理論的な根拠を与えるものと
考えられる。連詩を

という形を「付け合い」というものに伝える。連詩療法は、互い
の思いや感情を詩の作に伝えるこのことを「付け合い」という。

このように連詩療法は、連詩療法との違いを示すことができるが、

なぜなら詩は詩の作はある種の精神療法の技法として、詩の作

関係者との会話、書面作成(ライティング、コミュニケーション)

である。このように連詩療法は、連詩療法の技法として応用でき

が、「付け合い」というの会話、書面作成(ライティング、コミュニケーション)と<br>考えられる。<br><br>これまで連詩療法(Renalt-therapy)という発表の研究報告はい

マッツァとプレストロック(1981)の研究は報告されてい

マッツァとプレストロック(1981)の研究報告は報告されてい

マッツァとプレストロック(1981)の研究報告は報告されてい
連詩の心理治療的効果
一物語わねペンの事例の検討一
（小山田隆明）

【テキスト】

チェイスは、毎週一回何回も連詩を書き、ペンに話すことを強いられていない。二年後、ペンは会話を取って戻し、退院した。物言わぬペンは書く会話を経て音声会話をスピーチ・コミュニケーションを回復するまでの過程は、次のように分けることができる。（1）付け合いのない詩を書く。（2）付け合いのある詩を書く。（3）会話を回復する。詩の言葉が豊かになる。（4）詩に物語が生じる。（5）会話を回復する。付け合いのない詩を書く。
（１）《付け合い》のない詩を書く

チャエイスが、こんにちは。私はカレン・チャエイス。ここでみんなと詩を書いているの。あなたもやっていることと話かけたとき、ベンは壁をと見つめている、「チャエイス」と言えたのは驚いた。

翌週、チャエイスは、ベンと向かい合って座ったテーブルの上に石をひとつ置いた。前の週にベンに会ったとき、ベンが物をなくして石をひっつなかったので、石を持ってきた。チャエイスは、ベンに囲まれた紙に「わたしたちは石」と書き、ベンに渡した。互いにひと言葉を交わすことなく、詩の行を書いてはその紙をやり取りした。チャエイスは、ベンに心の世界ではなく外の世界を詩に書くと言った。個人的な事柄に触ることを避けた。しかし、チャエイスが「わたしたちは石」と書いたとき、ベンは自分を石に投影し、自分と沈黙の隣隠（マタファ）として用いていたことに気付いたという。その詩は、次のようであった（K）

（B）

 trata の 天気 の とき も

（K）

（B）

（2）《付け合い》のある詩を書く

ある年の春の里の花が咲いた。ベンと詩を書くようになって四ヶ月が経過した頃、チャエイスは陶器の破片を発見。それは私に大きな変化をもたらした。それは私が好きなもの。それは私が好きだっ

（K）

（B）

（九）

（九）
誰かのキットンの器の （K）
それはとても滑らかな肌ぎわり（B）
ベンは、相変わらずひと言も話すことなく詩の行を書いていた
が、書く前に詩を最初の行から読んでいないことに、チェイスは気付
いた。そこで、あるとき、ベンは、「詩の最後の行を書いていたという
合図をした。ベンは、「掛け合う」をはっきりと意識して詩の行を
書いていたことが認められた。
チェイスは、書かれた詩をゆっくりと声に出して読んだ。それを
聞いて、ベンの緊張は解き、仏生気を取り戻したように思われた
と言っている。それから数ヶ月後、誰が最初の一行を書かなかった
カラスに、カンバスに（K）
カアは危険な色（B）
アカは危険な色（B）
ベンの満足感は、アカの色を心に描く（K）
ブルーは非常に暗い（B）

（4）詩に物語が生じる
ベンの詩の言葉は、ままますます多くになり、表現は一層豊かなになった。
ペンは、太陽と雪についての物語を始めた。
物語（ストーリー）はシンプルである。太陽は姿を消し、寒く、暗い雪模様になる。太陽が再び現れる。しかも寒いままである。

ペンは、雪の中で過ごすペンの物語を書き始めたとき、チェイスはブリーズドという隠匿（メタファー）を用いて、ペンが自分の物語をやっくりと語り始めた時だった。

その後、ペンは、繰り返しブリーズドの風呂を詩の題材とした。
そしてその情景を詩に書いた。詩の中で、ペンはブリーズドの風呂はジェニーの両親のことを思い出させた、「あらゆるものを凍らせる」と書き、チェイスがブリーズドの風呂はジェニーの両親のことを思い出させた。「みんなすっかり冷たくなった」と続けなかったが、最後は「しっかり困ったのは何も起こらないか」と否定した。

現在までに書かれていたペンの詩に過去形が、そして未来形の表現が現れ、詩はより一層物語らしくなった。ペンがブリーズドの詩の物語を書き始めたとき、チェイスはブリーズドという隠匿（メタファー）を用いて、ペンが自分の物語をやっくりと語り始めた時だった。

(5) 音を回復する

一年が過ぎたある日、チェイスが詩の一行「季節外れに暖か」と書き、声に出して読んだとき、ペンが「暖かい」と言ったのには何が理由があるのだろう。と言ったのには驚き「イエス」「いい問題ない」としか言わなかったペンが、紙に書かれた詩の最初の行をみて声を発し、次に言葉を声に出した。それから後、ペンは徐々に自分の言葉を発するようになった。書き終えるばかりの詩を、チェイスは季節外れに暖かいと歌う。
連詩の心理効果
一物言わぬペンの事例の検討—
(小山田隆明)

イエスが声に出して読むのを聞いていたペンは、「この詩が好きだ」と言い、そして長いと無言であったが、詩は互いに連なるよう進んでいると言った。

ペンは詩の「付け合い」を繰り返すことで、会話の意図を回復し、沈黙の凹凸から解放されることがなかった。そして同病棟の患者と少しずつ会話を交わすようになった。ペンは、互いに音声会話の世界に戻ってきた。

5. 連詩の心理効果の目的は、「イエス＝ノーノー＝問題ない」とか言わぬペンの詩を取り戻すことで、沈黙の原因が明らかになり、詩の一発書きに戻った。

音声はその人の感情や思いを直接伝えるからである。そうして、ペンの自己の詩の行を書く前に、詩を最初から読んでいる様子がみられるようになった。このとき、イエスとペンの間に文学による会話、書字会話（ライティング・コミュニケーション）の上に、木、葉、陶器の破片などのろうろを置き、それを詩の一発書きに戻した。

最初の詩文は「わたしの石」でも、イエスは「付け合い」を意識して詩の一発書きを書いている。ペンには、「付け合い」の意味が入っている。言葉は発することがない外の世界を、言葉を書くことによって、ペンの「会話の恐怖」は少し和らげられ、連詩の心理効果が得られることである。
どんな問い答に、ベル・ナウル「問題な」ことか答えなかったのは、言葉を拾うことで現実を拾えるのであれば、と姫の言葉を回復させたが考えられる。それゆえ、連詩の「付け合い」を繰り返すことであると考えられた。しかし、実際の世界への関わりを深めつつあったことを意味していた。しかし、現実の世界を受け入れたわけではないと考えられる。それは、姫が自殺未遂を自覚していたこと、自覚した出来事をすべて否定していた。そして、『プリザードの詩』の中で、最後の一行で「何か困ったことは何も起こらなかった」と、出来事を否定しているからである。

プリザードの詩は、ベルの心の世界を揺るがす、メタファーで表現したものと考えられるが、この詩から何か沈黙の原因であったのか、来るのか考えられる。また、風の声が陣が、意識化されたと、それが何か解するほど、束縛が自由になるまでは、ベルの沈黙が原因である。長年に沈黙して、自分にとってても何が実感からか分からない場合もあるからである。しかし、ベルが会話への意欲を示すようになったことから、連詩の『付け合い』がベルの鬱積した感情を浄化、解放（カタルシス）する。

なぜ、『会話の恐怖』についての認知に変化を生じさせたことは確かなである。連詩を書くことの影響は、ベルだけでなく、チャイはにも認られるように、『窮屈さ』はベルの顕著なようなると、彼に接している時期が出来なかった。この『窮屈さ』の『自分』という体験は、ベルの存在性と似ていることに後になって気付いたとも言っている。このような共通の感情がベルとチャイに連詩を続けさせたと考えられる。大岡（1965）によれば、連詩の詩作者は詩の行を互いに『付け合い』することにより、他人を知ることに自己自身に気付くようになろうとしている。これは『付け合い』という連詩に特徴的な効果であると考えられる。

ベルの事例では、治療者が連詩の詩の行の『付け合い』を続けることで、書き手が詩を通じて声の会話の回復が図られ、詩の題材をさまざまな物を用いることで、外の世界に対する意や言葉を豊かにすることができることで現実の世界への関わりを深めることができた。それゆえ、詩の行を交互に『付け合い』という連詩療法により、他人とのコミュニケーションに障害がある人たちは、何らかの理由により会話を拒否している人たち、例えば選択性障害を経験した人々、絶対的な母音と、その後の会話に多あったが、何らかの理由により会話を拒否している人たち、例えば選択性障害を経験した人々、絶対的な母音と母音の違いを示した。
のとき、コラボレーティブ・ポエムのアイデアが明確になったとい

引用文献


